

日本の哲学教育史(上)

柴田隆行

shibata takeyuki

はじめに

日本における哲学の歴史を探ろうとすると、哲学がいつ誰によってどのような問題意識をもって営まれたかではなく、哲学がいつ誰によってどのように教えられ学ばれたかということに問題がすり替わっていることに気づく。日本では、哲学は「営まれる」のではなく、「教えられ」「学ばれる」ものとしてあった。

この小論はそのことの功罪を判定するものではなく、その事実を資料に即して検証することを目指す。具体的には、日本では哲学がとりわけ大学において教えられ学ばれてきたことに鑑み、近代日本の哲学の歴史を大学史という観点から解明する。もちろんそれにも多様な接近方法があるが、ここでは日本の哲学史上重要と思われるいくつかの大学を選び、その教育方法を講義要項などを通して見ることにする。最初に取り上げるのは、九州大学、広島大学、大阪大学、京都大学、立命館大学、同志社大学の六大学である。追って西から北へと、龍谷大学、大谷大学ほか、関東から北海道までの各大学を取りあげる（なお、収集した資料のごく一部しかここでは紹介できないので、調査しえた各大学の講義題目はインターネットで公開する www.toyonet.toyo.ac.jp/~stein/uni.html）。

講義内容が詳しく予告されるようになったのは一九七〇年代以降のことであり、それまでは講義題目を掲げて

いるにすぎない場合が多い。仮に講義内容が詳しく書かれていても、私自身の経験から言えば、実際の講義で予告通りに授業が進むとは限らないし、予告とまったく異なる内容の授業をする教員もいる。したがって、実態解明を目指しても、これだけでは難しい。この欠を補うためには、教員の講義ノートや学生の聴講ノートなどを参照しなければならぬが、今回は概観を把握するに努め、個々の講義の分析については後日に委ねざるをえない。現在平行して行っている研究として、この小論で紹介する哲学科とは別に、哲学の応用例とでも言うべきものの研究がある。改めて言うまでもなく、哲学科で教える哲学だけが哲学教育ではなく、ほかにもさまざまな名称や形態をもって営まれている哲学が日本には数多く存在するからである。それをも含んでぜひ解明しなければならぬと思われる研究対象として、教養課程で教えられる哲学がある。日本における哲学教育の実態を探るためには、専門の哲学科よりむしろ教養課程の方がはるかに興味深いし、重要かもしれない。大学で哲学を学ぶ学生の圧倒的多数は哲学を専門とするわけではないからである。だが、近年多くの大学で教養課程が解体され、講義概要を含む資料の保存場所を探りあてることが非常に難しくなっている。そもそも、ヨーロッパの諸大学と異なり、日本では大学史の資料がきちんと保存されるようになったのは比較的最近のことであり、大学にとって最も重要な資料のひとつと思われる講義概要や学生便覧を学科開設以来現在まで継続して保管している大学はきわめて少ない。東京大学を始めとしていくつかの大学で大学史料室がつくられ資料の保存がはかられているが、緒についたばかりとの感が強い。東洋大学でも、井上円了記念学術センターのなかに大学史関係の資料室があり、貴重な資料を数多く所蔵するとともに多くの研究成果を産んでいるが、大学全体のなかに正式に位置づけられて資料が組織的に保管されるという体制には残念ながらなっていない。

さて、本文に入る前に、貴重な資料の閲覧を許可して下さった九州大学大学史料室、立命館百年史編纂室、九

州大学、広島大学、大阪大学、京都大学、同志社大学各文学部事務室、ご助言を戴いた九州大学史料室折田悦郎氏に、この場を借りて御礼申し上げます。

第一節 九州大学

九州大学は、遡ると慶応三年創立の賛生館に行き着くが、大学史としては、一八七九年（明治一二）四月に創設された県立福岡医学校が母胎とされている。九州帝国大学が設置されたのは一九一一年であり、工科と医科の二科を擁した。法文学部が設置されたのは二四年九月である。四九年四月法文学部は法学部、経済学部、文学部に分けられた。文学部には哲学科・史学科・文学科が置かれた。

『九州大学五十年史 学術史』下巻（一九六七年）によると、一八年一二月に文部省は学校大増設計画を発表し、併せて帝国大学の収容力増大を計った。その際、政府は文学部もしくは文科的講座を設置する必要を認めず、東北帝国大学と九州帝国大学に法学部を置く方針だったが、貴族院が、法学士は巾広い教養を持つべきであると主張し、検討の結果、計画を変更し、法文学部を置くことになった。「法科の学生には人文的教養を、文科の学生には社会的関心と理解を身につけさせ、法と人間を結ぶ新しい学部を作ろうというのが法文学部設置のねらいであった」（二〇八頁）と見られている。

九州大学法文学部の創立委員長に美濃部達吉が就任。美濃部は「本学部二左ノ学科ヲ置ク 哲学科 法律学科 経済学科」と仮規定案に記し、法学と経済学の基礎として哲学を位置づけ、学科目に法律哲学や国家哲学などを盛り込んだが、文部省の指導により、実際にはその通りにならなかった。二四年九月、教授八人、助教授二人、書記二人という陣容で法文学部は設置された。哲学関連の講座としては、哲学哲学史第一講座（哲学概論・論理

学・認識論」と倫理学講座がまず置かれ、翌年五月哲学哲学史第二講座（西洋哲学史、さらに翌二六年五月に哲学哲学史第三講座（国家および社会哲学）と印度哲学史講座、中国哲学史講座が、そして二七年一〇月に美学美術史講座がそれぞれ増設された。

哲学哲学史第一講座の初代教授は四宮兼之で、以降、矢崎美盛、田邊重三、鬼頭英一、今道友信、黒田亘、稲垣良典、谷隆一郎、教養部教員佐々木一義、黒積俊夫、菅豊彦らが講義と演習を担当した。四宮は四四年四月に満洲建国大学に移るまで本講座を担任し、学科の基礎を築いた。在任中は、概論のほか、近世哲学史、ドイツ観念論哲学、現代の哲学などを講義し、演習ではカント、フッサール、デイルタイなどを講読した。矢崎は概論のほか、近世哲学史、形式論理学などの普通講義、「ドイツ学派の表象論」「可能性の問題」などの特殊講義を担当、演習ではカント、ヘーゲル、ボザンケットを読んだ。田邊は生の哲学を講義するほか、演習ではデカルト、ライプニッツ、ベルクソンなどを読んだ。

哲学哲学史第二講座は西洋哲学史、第三講座は国家および社会哲学を扱ったが、七〇年代以降は第二が古代中世哲学史、第三が近世哲学史を扱っている。ただし、『九州大学七十五年史』史料篇上に収録されている二八年の記録では、第一講座西洋近代哲学史、第二講座哲学概論、論理学、第三講座西洋古代哲学史とされ、第一講座担当教授四宮兼之、第二は空席、第三は中島慎一で、助教授矢崎美盛、助手中村克己の名が見られる。第二講座は、二九年五月に鹿子木員信が就任するまで主任教授を欠いていた。近世哲学史の講義は第一講座の四宮と矢崎が交互に担当し、古代哲学史は第三講座にいた鹿子木と講師の菊池慧一郎が担当した。鹿子木は海外研究から帰国後、本講座主任となり、西洋古代・中世哲学史のほか、「プラトン理想主義の誕生および発展」「皇道の研究」などを講義、演習ではプラトン、アリストテレス、シュプランガーなどを読んだ。とくに力を注いだのが精神史

学概論で、鹿子木は「近代の自由主義・個人主義の退廃の血路を国家主義・民族主義・皇道主義に見出し得たと信じた」と『五〇年史』に書かれている。鹿子木は三九年四月軍属となって転出した。その後、教授ポストは空席となり、戦後の四八年六月によりやく長澤信寿が就任した。以降、半田敏治、田中晃、瀧澤克己、副島民雄、藤澤令夫、松永雄二、中畑正志、納富信留らが講義と演習を担当した。第三講座の初代教授は中島慎一で、近世哲学史のほか、「ドイツ・ローマン主義の社会哲学」「ギリシア人の国家およびその理想」「西洋中世の国家観」などを講義、演習ではカント『純粹理性批判』を最も多く用いた。四三年中島病没後、政府の行政簡素化政策により教員補充ができず、ふたたび教授を迎えたのは五五年になってからだった。二代目教授は山本清幸で、「国家・社会哲学を含む」と副題をつけた近世哲学史を長年担当した。第三講座は山崎庸佑、圓谷裕二に受け継がれている。

『九州大学五十年史』によると、学科開設以来六六年までの卒業生は旧制七六名、新制一九名で、卒業論文ではカントを扱ったものが一番多く、新旧合わせて二三、次いでプラトニー、ヘーゲル八と続く。これは演習教材と連動しており、プラトン五五回、カント四一回、ヘーゲル三二回、アリストテレス三二回、アウグスティヌス二三回を数える。

倫理学講座は法文学部設置と同時に開設された。初代教授は大島直治である。大島の停年退官後しばらく四宮と中島が兼任したが、中島没後担任を欠き、講師の永野羊之輔も応召したため、四六年以降法文学部から倫理学講座は消えた。講義が再開されたのは、四八年に瀧澤克己が教授として就任してからである。瀧澤は七一年五月に依願退職するまで本講座を守った。その後、新開長英、森田良紀、増永洋三、細川亮一により受け継がれている。大島は西洋倫理学史としてギリシア思想史を、倫理学概論としてカント倫理学を長年講義した。演習ではア

リストテレス、カント、N・ハルトマンなどを読んだ。瀧澤は「倫理学の基本問題」を講じたほか、演習ではサルトル『存在と無』、フォイエルバッハ『キリスト教の本質』、マルクス『経済学批判』、バルト『ロマ書』などを読んだ。

つぎに、講義概要をもとにさらに詳しく教育内容を見てみることにしよう。九州大学では講義内容がわかる公的資料は、九五年度の『授業計画 Syllabus』導入までは『講義題目』だけである。現在大学史料室ならびに文学部事務室に所蔵されているのは二九年度第二学期以降のものである。それによると、二九年度第二学期は文科関係科目としてつぎのような科目が開講されている。「精神史学概論 鹿子木員信」「精神史学概論演習 鹿子木、用書 Spranger, Lebensformen」「ツッキザデス 鹿子木、用書ツッキザデス『ペロポネソス戦史』」「プラトンの国家(原典講読) 鹿子木、用書プラトン『ポリテイア』」「プラトン『アポロギア』」「クリトン 鹿子木」「哲学演習 四宮兼之」、「西洋哲学史」として「西洋近世哲学史概説第二部 中島慎一」、「倫理学及倫理学史」として「倫理学概論 大島直治」と「演習 カント『実践理性批判』 大島」である。翌年度前期も大差なく、「希臘語初歩 Allen, The first year of Greek 鹿子木員信教授、半田敏治囑託補助」「論理学ノ中心問題 中村克己」「プラトン理想主義の誕生及び発展 鹿子木」「倫理学演習 Husserl, Formale und transzendente Logik 大島」などが注目される程度である。

戦時中の四三年度第一学期は、哲学として「演習 Kant, Kritik der reinen Vernunft 四宮兼之」「演習 Hegel, Phänomenologie des Geistes 四宮」「希臘語初歩 田中晃」、西洋哲学史として「アリストテレス研究 田中」、西洋哲学史又は西洋倫理学史として「西洋近世哲学史 四宮」、「国家及社会哲学又は倫理学」として「特講 実践ノ構造(法ト道德) 田中」が見られるだけで、科目数がかなり限定されていることがわかる。戦

後の五一年度第二学期も戦前とさほど大差ない。すなわち、哲学として「哲学演習Aカント 田辺重三」「哲学演習Bハイデッガー 田辺」「中世哲学（社会と個人に於ける正義）デロリエ講師」、哲学又は哲学史として「生の哲学（西洋現代哲学史） 田辺」「古代中世哲学史 長澤」「中世哲学演習（ラテン語）Augustini Confessiones 長澤」「古代哲学演習第一（ギリシャ語）Platonis Phaed 長澤」「古代哲学演習第二Aristoteleis De Anima 長澤」、西洋哲学史として「中世に於けるAnimaについての思想 デロリエ」、倫理学として「概論 倫理学の基本問題 瀧澤克己」「演習 スピノザ『エティカ』 瀧澤」「演習・キリスト教倫理の研究 瀧澤」などがある。これで見る限り、学問の世界は政治や社会と隔絶しているように見える。

ちなみに、一九四八年一月米国人文学科顧問団が九州大学を訪問し、各学科毎に今後の教育方針について関係者と懇談しているが、そこでの長澤信寿の発言が興味深い。長澤はここで次のように発言している。「日本の目下の問題は日本の民主化である。その為にはギリシャ哲学の理解を深める事が必要である。日本軍国化の過程は、明治時代に哲学を輸入したがその入れ方が浅く、その思想を根源にさかのぼって理解しなかった為、容易に軍部に利用されたからである。現下の日本の問題は民主思想の根源であるギリシャ哲学を根本から理解するにある」（『九州大学七十五年史』別巻、一九九二年、八二頁）。長澤には、明治二〇年代以降の日本における、社会と隔絶した訓古学的哲学研究のあり方への反省や、九州大学固有の「国家および社会哲学」講座（その代表が皇道主義者の鹿子木員信である）が現実を果たした役割への反省など微塵もない。しかし、戦後の九州大学の哲学教育はまさに長澤の目指した通りに、古典研究に徹するようになった。

五〇年代に入り講義と演習という形式が定着する。五五年度には「哲学講義 生の哲学（デイルタイとベルグソン） 田辺重三」「哲学演習 Leibniz, Discours de la metaphysique 田辺」「哲学講義 原始キリスト教とヘレ

ニブムの哲学 長澤信寿」「演習（自然法と国家学）Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts 山本清幸」「古代哲学史演習 Platon, Phaedo 長澤」「中世哲学史演習 Augustinus, De civitate dei 長澤」「近世哲学史特講 シェリングとシェリング主義 山本」「倫理学特殊講義 カール・バルトと現代の哲学的人間学 瀧澤克己」「演習 バルトとフォイエルバッハ 瀧澤」などが見られる。六五年度以降もカリキュラムは一〇年前と基本的な変わっていない。八五年度にコース数がほぼ倍増するが、基本は同じである。

前述したように、九五年から『授業計画 Syllabus』が導入され、従来の講義題目に加えて若干の解説が記されるようになった。たとえば「哲学講義 自己と超越 谷隆一郎。西洋の哲学思想の源流である教父・中世の伝統を中心として取り上げつつ、自己と存在（『神』の問題を扱う）」「西洋哲学史講義 自己の研究 山崎庸佑。自己と他者の関係について述べ、後半でショーペンハウアーの意志哲学がもつ意味について講ずる」など。

さて、九州大学だけで多くの紙数を費やしてしまったが、最後に九州大学における哲学教育の特徴を簡単にまとめておこう。まず、法文学部設立に際して目指された法学と人文科学との結合という理念は哲学哲学史第三講座においてそれなりに実現されたが、時代の潮流に合わせて次第に民族主義、さらには皇道主義として学問からイデオロギーに転落した。そのため、戦後は哲学の古典を純粹に研究することが中心となり、それはそれなりに成果を産んだが、逆に獨自性が失われたように思われる。そのなかで目立ったのが、戦前から戦後にかけて長く勤めた倫理学講座の瀧澤克己であり、かれの依願退職の理由も当時の大学闘争と無縁ではなく、瀧澤は自らの哲学的営為を政治的社会的現実の問題解決のなかで試そうとしたと言える。

第二節 広島大学

広島大学の前身は、広島高等師範学校および広島文理科大学である。広島高等師範学校は一九〇二年四月文部省直轄諸学校として東京高等師範学校、女子高等師範学校などとならんで設立された（以下、『創立四十年史』（広島文理科大学・広島高等師範学校）一九四二年、一九八二年復刻、参照）。広島文理科大学は二九年に設立され、広島高等師範学校はその付置学校となる。さらに戦後の四九年五月に広島大学が設立され、広島文理科大学と広島高等師範学校は、広島高等学校その他とともに広島大学に包括された。

広島高等師範学校は設立当初、予科一年、本科三年と定められ、国語漢文部、英語部、地理歴史部、数物化学部、博物学部との五部に分かれた。予科では、倫理（人倫道德の要旨）、論理（論理学の概要）が、国語、漢文などとならんで教えられた。本科では、文系で倫理と哲学が、理系では倫理が必修とされた。倫理は、第一学年対象に実践道德と倫理学史、第二学年対象に倫理学史、第三学年対象に倫理学が教えられ、哲学は第三学年対象に二期哲学概論が教えられた。一五年に校則が改正されて予科がなくなり、文理各科三部制で修業年限四年となった。文科では修身、論理学、哲学が、教育学や歴史などとともに必修となった。

二九年に設立された広島文理科大学は教育学科、哲学科、史学科など九学科を擁する。哲学科は哲学哲学史専攻と倫理学専攻に分かれる。各科共通科目は国民道德、哲学、倫理学、心理学、教育学であり、哲学科哲学哲学史専攻は哲学哲学史、東洋哲学史、論理学及認識論、倫理学（東洋及西洋）、社会学、教育学を、倫理学専攻は倫理学（東洋及西洋）、東洋哲学史（支那及印度）、論理学及認識論、哲学、社会学、教育学を学習することになっている。担当教員として、哲学専攻は勝部謙造、河瀬憲次、木村素衛、高田三郎が、倫理学専攻は西晋一郎、山本幹夫、大島直治、加藤常賢、西川平吉、正木慶秀、小林健三が代々就任した。高等師範学校教官には、修身担当

として深田藤治、藤井種太郎、西川平吉、西晋一郎、白木豊、服部富三郎、手塚良道、森瀧市郎、村岡典嗣、清原貞雄が、論理哲学担当として西晋一郎、小林郁、岡部為吉、勝部謙造、木村素衛、錦田義富、河瀬憲次、大槻正一、古賀行義、野田義夫、塚原政次、久保良英、楠弘閣、高橋悦郎が代々就任した。のちに、高等師範学校から広島大学へは森瀧市郎が、文理科大学から広島大学へは山本幹夫がそれぞれ転任となった。

広島大学については、大学史が発行されていないので詳細不明だが、現在文学部事務室に所蔵されてある『学生便覧』によると、五五年度には文学部、教育学部、政経学部、理学部、医学部、工学部、水畜産学部があり、文学部は哲学科、史学科、文学科を擁した。哲学科は哲学第一講座（哲学概論）、哲学第二講座（西洋哲学史）、中国哲学第一講座（古代哲学）、中国哲学第二講座（中世及び近世哲学）、倫理学第一講座（倫理学）、倫理学第二講座（倫理学史）に分かれている。哲学第一講座教授は山田正司、助教授は三渡幸雄であり、哲学第二講座教授は松本厚で助教授は空席、助手に横尾壮英がいた。倫理学第一講座教授は山本幹夫、助教授は小倉貞秀であり、倫理学第二講座教授は森瀧市郎、助教授は永野羊之輔、助手に河野真がいた。哲学第一講座はその後、三渡幸雄、隈元忠敬、高柳央雄、山内廣隆、哲学第二講座は清水純一、西川享、水田英実、赤井清晃、倫理学第一講座は小倉貞秀、新本豊三、越智貢、倫理学第二講座は永野羊之輔、河野真、弘睦夫、近藤良樹がそれぞれ受け継いでいる。

広島大学で『学生便覧』に個別の講義題目が記されるようになったのは六六年度以降のことで、それまでは教官名と科目名が記されているだけだった。たとえば五五年度の哲学専攻科目は、哲学・哲学史第一講座、哲学・哲学史第二講座、倫理学・倫理学史、中国哲学、宗教哲学、美学・美術史、心理学、社会学、古典語（ギリシヤ語・ラテン語）、倫理学専攻科目は倫理学・倫理学史第一講座、倫理学・倫理学史第二講座、哲学・哲学史、中国

哲学、宗教哲学、美学・美術史、心理学、社会学、古典語（ギリシャ語・ラテン語）である。

六六年度前期の講義題目は次の通り。哲学講座には「講義 哲学の基本的諸問題（一）人間・歴史・神 三渡」「演習 J. Kraft, Von Husserl zu Heidegger 三渡」「演

習 Kant, Kritik der praktischen Vernunft 三登義雄」、哲学史講座には「講義 西洋古代中世哲学序説 松本

厚」「講義 西洋古代哲学史 松本」「演習 ストア思想の研究 松本」、倫理学講座には「講義 倫理学概論

小倉貞秀」「演習 Jaspers 講読 小倉」「講義 実存主義の倫理問題 小倉」、倫理思想史講座には「演習 E.

Brunner, Das Grundproblem der Ethik 河野真」「講義 ドイツ観念論の崩壊と人間的自由の問題 河野」「演

習 西洋倫理学通史講読 河野」「演習 Kant, Kritik der praktischen Vernunft 河野」が設置されている。七

一年度に科目名が大きく変更になり、哲学講座では西洋哲学特講Ⅰ、西洋哲学概論、西洋哲学演習ⅠⅡ、哲学史

講座では西洋哲学史概説ⅠⅡⅢ、西洋哲学史演習ⅠⅡ、倫理学講座では倫理学概論Ⅰ、倫理学特講ⅠⅡ、倫理学

演習ⅠⅡ、倫理思想史講座では倫理思想史概説Ⅰ、倫理思想史演習ⅠⅡⅢ、倫理思想史特講Ⅰが開講された。

紙面の都合でその他は省略する。九四年度から『授業計画書（シラバス）』が導入されている。九五年度シラ

バスからその一部を紹介しよう。「哲学概論Ⅰ 哲学の根本問題 高柳央雄。哲学において論議された様々な問

題について考察する。哲学とは何か。哲学と科学。信仰とニヒリズム」「哲学演習Ⅰ 西洋近世哲学史演習 高

柳。Jaspers の原典を精読しながら、近世から現代に至る哲学の諸問題を検討・考察する。テキスト Jaspers,

Der philosophische Glaube」「西洋哲学史概説Ⅰ 西洋哲学史概説 西川享。前期は前ソクラテス期の思想家か

らソクラテスに至る古代ギリシアの思想家を系譜的に取り上げる。後期は主としてプラトンからアリストテレス

の思想内容やその特色を著作の成立年代に沿って解説し、それぞれの思想の変遷と関連を明示する。また、その

思想の現代に与えた意義を考えさせる」「西洋哲学史概説Ⅱ 西洋中世哲学史概説 水田英実。キリスト教哲学としての中世哲学というE・ジルソンの見解等に検討を加えた後、個々の思想について講述する」「哲学史特講Ⅰ 古代哲学史料研究 西川享。古代哲学に関する史料を用いて思想内容を把握するにはどのような方法がとられるかを解説し、資料分析を行う。一部原典解説を含む。主としてVorsokratikerに関するものを扱う」など。

最後に広島大学における哲学教育の特徴をまとめておく。高等師範学校及び文理科大学時代には修身が中心に据えられ、それなりの独自性を保持していたが、戦後新たに設置された広島大学は、大学総体としては教育、とりわけ平和教育に積極的に取り組んでいるが、哲学科のカリキュラムを見る限りでは、そのような特徴はほとんど見られない。教官の異動が比較的小さく、そのために担当教員に大きく依存した教育内容が見られる。たとえば、他大学では人気のあるプラトンやデカルト、ロックなどがほとんど扱われず、最近までヘーゲルもほとんど扱われなかった。その一方で、小倉貞秀以来現在の高柳央雄に至るまでなぜか一貫してヤスパース哲学が扱われている。弘睦夫のマルクス主義研究と英語圏倫理学研究がともに長年継続して行われているのも特徴と言える。日本におけるフィヒテ研究の主導者の一人である隈元忠敬、シェリング研究の主導者の一人である河野真がいるのも興味深い事実である。教育形態は比較的単純で、初期は講義と演習の二本立て、七〇年代以降は特講、概論・概説、演習の三本立てである。なお、教養部や総合科学部、学校教育部など他学部にも所属する教員が哲学科の講義や演習を比較的多く兼担しているのも国立大学のなかではめずらしい例である。

第三節 大阪大学

大阪帝国大学は一九三一年に設立された。創設時の学部は医学部・理学部・工学部であった。四七年に国立総

合大学大阪大学と改称し、四八年法文学部が設置された。翌四九年法文学部は文学部と法経学部に分離し、文学部には哲学科と史学科と文学科が属した。このうち、哲学科は哲学哲学史第一、哲学哲学史第二、支那哲学、倫理学、社会学第一、心理学第一、教育学第一、教育学第二の八つの講座を擁した。「哲学と哲学史は不可分であるとの観点から」(『大阪大学五十年史』部局史、一九八三年、一七頁)、哲学哲学史講座が四八年九月開設。第一講座の担当教授はフランス哲学を専攻していた澤潟久敬であり、「澤潟は当時の日本哲学界の一つの欠陥であったフランス哲学研究の充実および科学哲学の研究によってこの講座を特色づけようとした」(同右)。第一講座は、澤潟のあと、矢内原伊作、三輪正、山形頼洋、望月太郎らフランス哲学研究者によって受け継がれている。哲学哲学史第二講座は四九年五月に設置され、初代教授に伊達四郎が就任した。伊達は「弁証法の歴史的研究」という講義を継続して行った。伊達のあと、第二講座は平下欣一、高橋昭二、里見軍之、溝口宏平、浅野遼二、入江幸男らドイツ哲学研究者が担当している。『五十年史』によると、「伊達は本講座の特色として、(一)アカデミズムの確立、(二)哲学の普遍性の標榜、(三)現代的課題の探求、を挙げた。この要求は今日そのまま継承され、本講座の理念となっている」(同右二〇頁)とある。倫理学講座は哲学哲学史第二講座と同じ四九年五月の設置で、相原信作が初代教授に就任した。相原のあと、岸畑豊、塚崎智、鷺田清一、中岡成文、本間直樹が本講座を担当している。

つぎに、『学生便覧』によってその具体的な内容を見ることにしよう。五四年度哲学科哲学哲学史専攻には「普通講義 哲学論 澤潟久敬」「特殊講義 ベルグソンの科学論 澤潟」「演習 Descartes, Meditations metaphysiques 澤潟」「特殊講義 フランス哲学史 矢内原伊作」「演習 Ravaisson, De l'habitude 矢内原」「特殊講義 弁証法の歴史的批判的研究 伊達四郎」「演習 Kant, Kritik der reinen Vernunft 伊達」「特殊講義 ド

イツ哲学史 平下欣一」「演習 Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts 平下」「特殊講義 ギリシア哲学（アリストテレース以後）（集中講義） 長沢信寿」「特殊講義 中世哲学 高田三郎」が、倫理学専攻には「普通講義 倫理学概論 相原信作」「特殊講義 倫理学の根本問題 相原」「演習 Aristoteles, Ethica Nicomachea 相原」「特殊講義 人倫の問題とその発展 岸畑豊」「演習 Kant, Kritik der praktischen Vernunft 岸畑」が開講されている。その後も体勢に大きな変化はない。六五年、国立大学としては早い時期に講義概要が記された。たとえば「哲学史特殊講義 フランス哲学における個性の問題 澤潟久敬。個性の尊重はフランス思想の根本的特色の一つである。この講義ではフランスの哲学者たちがそれぞれ個性をどう理解したか研究したい」「哲学史特殊講義Ⅰ フランス近世哲学史 矢内原。デカルトからベルグソンにいたる近代フランス哲学の発展を概観し、フランス的思惟の特色を把握するとともに現代における哲学的思索に資することを目的にする」「哲学特殊講義 弁証法の歴史的批判的研究——キルケゴールの実存弁証法について 伊達。前年度に引き続きキルケゴールの実存弁証法の本質を彼の父及び許婚者との人間関係並びに特にソクラテス・ヘーゲルに対する思想関係から講述する」「哲学史特殊講義Ⅱ・アウグスティヌスからスコトゥス・エリゲナへの存在論の発展 長沢。アウグスティヌスの哲学は、ギリシャの自然存在論をキリスト教的存在論に転向せしめたものである。しかしそこには、どうしても克服しなければならないアポリアがあった。彼はこのアポリアを充分に克服することができなかった。このアポリアがエリゲナへの哲学として発展する」「倫理学普通講義 倫理学概論 相原。マルクス主義の理論体系においても倫理学の部分だけが空白であるといわれる。これはどういう意味であろうか」などの記述が見られる。

現在は組織が大きく改変され、哲学科は哲学・思想文化学専修と倫理学専修に分けられ、各科目半期制となっ

た。哲学・思想文化学専修では、従来の哲学演習や哲学史講義、哲学史演習とならんで、現代哲学演習や講義、生命哲学講義などの新しい科目が見られる。倫理学専修でとくに目を引くのは「臨床哲学講義 中岡成文 ひとは何を欲求するか」「臨床哲学講義 鷲田清一 感覚について」などである。また、「社会哲学講義 本間直樹 コミュニケーションと社会」も従来なかった科目である。

大阪大学における哲学教育の特徴は、何といっても最近まで続いていたフランス哲学重視である。その他、矢内原伊作、伊達四郎、相原信作、高橋昭二など個性的な学者を多く輩出しているのも特徴のひとつに数えられる。授業科目の数が他大学と比べて少ないが、それは受講生の数がきわめて少ないことによる。卒業生数で見ると、四八年度以降八〇年度までの三二年間に哲学哲学史専攻は九七名、倫理学専攻はたったの二一名である。哲学、倫理学ともに卒業生ゼロという年度が数回あり、私立大学の大学院生の数に等しい少数精鋭の授業が行われている。

第四節 京都大学

京都帝国大学は一八九七年に設立された。文科大学が開設されたのは一九〇六年九月であり、最初に哲学科が、翌年九月に史学科、さらにその翌年の九月に文学科がそれぞれ開かれた。開設時の文科大学規定によれば、哲学科、史学科、文学科が置かれ、哲学科の正科目として哲学、西洋哲学史、印度哲学史、支那哲学史、心理学、倫理学、教育学教授法、美学美術史、宗教学、社会学が、副科目として生物学、生理学、精神病学、文学概論、国文学、支那文学、経済学、統計学、教育行政法、英語、仏蘭西語、独逸語、梵語、希臘語、羅旬語が開講された（『京都大学文学部五十年史』一九五六年、参照）。

『京都大学百年史 部局史編一』（一九九七年）にはつぎのような記述が見られる。「正科目の講義は普通講義・特殊講義・演習の三種よりなるが、各学科の所属学生はまず所定の正科目の全部にわたってその普通講義を必修し、さらにそれらのうちから一科目を選んで専攻科目とし、その特殊講義と演習を必修する。普通講義は概説的なもので、原則的に一回生に履修させる。特殊講義は専攻学生のため、特殊な問題につき教官が研究成果を講義するもので、学生に事実の知己を授けるとともに研究の範例を示すことを目的とする。一般的には普通講義を履修した二回生以上の学生が聴講する。演習は主として卒業論文の作成に当たる三回生を対象に、専攻学生に任意の問題を研究させ、あるいは教官が出題して報告を提出させ、これを教官が指導批判して実地に研究方法を会得させる」。

哲学哲学史講座は、当初、第一講座（哲学・西洋哲学史）、第二講座（印度哲学史）、第三講座（支那哲学史）を擁したが、一二年五月に第四講座が増設され、これによって第一講座は哲学体系、第四講座は西洋哲学史を担当することとなった。その後さらに増設されて、四七年には第六講座まで開設された。四七年の講座表にはつぎのように記されている。哲学哲学史第一講座（哲学）、同第二講座（印度哲学史）、同第三講座（支那哲学史）、同第四講座（西洋哲学史・近代）、同第五講座（同・古代）、同第六講座（同・中世）、心理学講座、倫理学講座。美学美術史第一・第二講座、宗教学第一講座（宗教学）、宗教学第二講座（基督教）、宗教学第三講座（仏教学）。その後、哲学哲学史講座は第一が哲学体系、第二が古代哲学史、第三が中世哲学史、第四が近世哲学史、第五がインド哲学史、第六が中国哲学史というように名称変更された。九五年に大規模な組織変更があり、文学部は一学科六系統一六大講座となった。すなわち、文学部人文学科として、東洋文献文化学系（国語学、国文学、中国語学、中国文学、東洋古典学）、西洋文献文化学系（西洋古典学、ヨーロッパ・アメリカ語学、ヨーロッパ・アメリカ文学）、思想文化

学系（大講座）哲学、宗教学。「分野」哲学、西洋古代哲学史、西洋中世哲学史、西洋近世哲学史、倫理学、宗教学、キリスト教学、日本哲学史。「大講座」美学・美術史学。「分野」美学・芸術学、美術史学、比較芸術史学、歴史文化学系（日本史学、東洋史学、西洋史学、考古学）、行動文化学系（心理学、言語学、社会学、地理学）、現代文化学系（現代文化学）である。このような大規模改革以前の京都大学の哲学講座のあり方は、哲学史の常識的区分に忠実に従ったもので、哲学史区分そのものが疑問に付されている現在、従来の哲学史区分を制度的に定着させ、学問の細分化を推し進めたものとしてその功罪が問われている。

話を少し戻す。哲学科哲学講座は、桑木厳翼、朝永三十郎、西田幾多郎、田邊元、高山岩男、山内得立、三宅剛一、野田又夫、辻村公一、木曾好能、伊藤邦武によって、西洋哲学史講座は桑木厳翼、朝永三十郎、天野貞祐、西田幾多郎、山内得立、九鬼周造、高坂正顕、野田又夫、田中美知太郎、高田三郎によって代々担当された。第二講座（改称後）は田中美知太郎、藤澤令夫、内山勝利が、第三講座は高田三郎、山田晶、山本耕平が、第四講座は野田又夫、西谷啓治、辻村公一、酒井修、蘭田坦が代々担当している。倫理学講座は狩野亨吉、友枝高彦、藤井健治郎、千葉胤成、和辻哲郎、天野貞祐、島芳夫、保田清、森口美都男、西谷裕作、内井惣七、加藤尚武が、宗教学講座は松本文三郎、西田幾多郎、波多野精一、西谷啓治、武内義範、久松真一、有賀鐵太郎、上田閑照、長谷正當、藤田正勝が受け継いでいる。

京都大学では現在に至るまで講義題目だけが学生に予告され、具体的な内容の提示はない。二四年度の講義題目は次のようになっている。哲学専攻「普通講義 哲学概論 西田幾多郎」「特殊講義 アリストートルの形而上学について 西田」「特殊講義 現象学の発展 田辺元」「演習 Lotze, Metaphysique, Hegel, Phänomenologie 西田」「講読 Kant, Kritik der Urteilskraft 田辺」「西洋哲学史専攻「普通講義 西洋哲学

史 朝永三十郎」「特殊講義・カント及びカント後の哲学 朝永」「演習Kant, Kritik der reinen Vernunft 朝永」、倫理学専攻「普通講義 一般倫理学 藤井健治郎」「特殊講義 社会主義の倫理 藤井」「演習 Lipps, Ethische Grundfragen 藤井」。

カリキュラムも現代まで基本的に講義・演習の組み合わせで、変更がない。細かく言えば、戦前までは普通講義・特殊講義・演習、戦後は講義・研究・演習・講読となっている。講義は、西欧の大学と同様、教授が自分の研究成果を披露する場となっており、つねに注目を引いた。二七年度の特殊講義には、田邊元「意識の歴史的社会的構造」、天野貞祐「純粹理性批判ノ根本問題」、藤井健治郎「家族制度の倫理」など、三五年度には田邊元「意識の形而上学的構造」、山内得立「ミユトスの研究」、九鬼周造「近代フランスの実証的形而上学」、四〇年度には田邊元「倫理の弁証」、高山岩男「歴史的時間の諸相」、島芳夫「倫理と社会現実」などが見られる。学生たちは高度な内容について行くのに必死だったが、つねに最新の研究成果が聞かれるとあって、緊張感をもって受講したとの思い出話が数多く残されている。たとえば信太正三は田邊元の講義についてつぎのように書いている。

「毎年の哲学概論と、新しいテーマによる年度毎の特殊講義には、胸を踊らせて最前列の机にしがみついた。(中略) 哲学概論の講義を、はじめて聴いたとき、先生の進る言々句々を通じて襲うて真理への情熱が私を圧倒するような感じで、ときどき頭がくらくらする経験に打たれた。その講義は、毎年また新しくはじめられたが、倦きもせず私は出席した。この一点だけは、馬鹿みたいに真面目な生徒であったことを、自分なりに思っている。『ここに哲学の精神が生きている』と、しみじみ私は思っていた。自分が考えることは、もう無い、とまで感じられることもあったが、それほど先生の人格と学問に傾倒していたようだ」(「田辺先生の想い出」

『理想』三五七号、一九六三年二月。

京都大学の哲学教育の特徴は、普通講義や特殊講義のほかに、演習での原典による古典講読の徹底が挙げられる。たとえば六〇年度の演習は、哲学専攻で野田又夫 Kant, Kritik der reinen Vernunft、西谷啓治 Kierkegaard, Der Begriff Angst、澤鴻久敬 Descartes, Discours de la methode、森口美都男 Hume, A Treatise of Human Nature、H. Buchner: Heidegger, Vom Wesen der Wahrheit、西洋哲学史専攻で田中美知太郎 Aristoteles, Metaphysica、同 Thucydides、高田三郎 Thomas Aquinas, Summa theologiae、服部英次郎 Boethius, Scotus Eriugena, Anselmus, Abaelardus、鈴木照雄 E. Rohde, Psyche、山田晶 Augustinus, Confessions、倫理学専攻で岸畑豊 Hume, A Treatise of Human Nature などとなっている。九五年度でもこの伝統は守られており、哲学専攻では竹市明弘 Heidegger, Sein und Zeit、薮木栄夫 Kant, Prolegomena、小林道夫 Descartes, Les principes de la philosophie、宗像恵 Leibniz, Nouveaux essais、西洋哲学史専攻で内山勝利 Platon, Theaetetus、小池澄夫 Aristoteles, Analytica Posteriora、山本耕平 Thomas Aquinas, Summa theologiae、同 Thomas Aquinas, Spiritualibus Creaturis、宮谷宣史 Augustinus, Confessiones、蘭田垣 Kant, Kritik der reinen Vernunft、藤田正勝 Hegel, Phänomenologie des Geistes、山形頼洋 Bergson, Matière et memoire、早瀬明 Hegel, Der Geist des Christentums und seine Schicksal、倫理学専攻で有福孝岳 Kant, Kritik der Urteils-kraft、加藤尚武 Fichte, Grundlage des Naturrechts があり、まさに横文字原典オンパレードである。

第五節 立命館大学

私学についても見ておきたい。立命館大学の前身は一九〇〇年（明治三三）に設立された京都法政学校であ

り、法律科と政治科の二科があった。一年次生を対象に島文次郎が論理学を教えている。一九〇四年に京都政法大学と改称、一九年に立命館大学となった。二九年の記録によると、野々村直太郎が哲学、倫理学、実践倫理を教え、小林照明が倫理、哲学、社会学を教えている。四一年法文学部開設、法政学科と文学科（漢文学科、国文学科、史学科、地理学科）を置いた。四二年哲学科が増設されたが、四三年国体学科と改称、四四年立命館専門学校と改称、文学科は国語・漢文科、歴史・地理科、国体科に改組された。さらに四五年一月文学科は東亜文学科と改称されるなど、戦時体制が強化するなかで立命館は徹底的に時代に翻弄された感がある。国体科の授業科目は次のように国体一色である。一年生対象として皇教学（或詔勅学）、国体学概論、日本思想史、論理学及心理学、倫理学概論、古典講読、国史、東洋史、西洋史、宗教学、外国語、二年生対象として皇教学、憲法、日本思想史、東洋倫理學史、西洋倫理學史、哲学概論、古典講読、国史、東洋史、西洋史、教育学、外国語、三年生対象として国体倫理學、国体學特論、国体論史、東洋倫理學史、西洋倫理學史、西洋哲学史、社会学、古典講読、国史、日本宗教史、教育史、外国語（『立命館五十年史』一九五三年）。

戦後直後の四五年一〇月東亜学科はふたたび文学科に戻った。五〇年度の哲学科哲学専攻の開講科目は、国分敬治「西洋古代中世哲学史」、山元一郎「西洋近世哲学史」、笠原伸二「東洋哲学史（第一部）」、佐保田鶴治「東洋哲学史（第二部）」、山元「哲学概論（第一部）」、武田弘道「哲学概論（第二部）」、山口恵照「論理学」、内藤耕次郎「心理学概論」、細野武男「社会学概論」、国分敬治「哲学演習（其一）」、山元「哲学演習（其二）」、吉田忠勝「哲学特殊問題（其一）」、山口「哲学特殊問題（其二）」、上子武次「外国書講読（其一）」、野村純孝「外国書講読（其二）」、鈴木照雄「古典学」、佐保田「宗教学」、森昭「教育学」、天野利武「教育心理学」、堀江英一「社会学特殊講義」、大橋恒雄「心理学特殊講義」、内藤耕次郎「心理学演習」「心理学実験」、大橋恒雄「心理学実

験」である。

五九年度『学修要項』に哲学専攻の特色が簡明に描かれているので引用しよう。「哲学は従来、『万学の女王』といわれているのであるが、本学の哲学専攻では、高い真理を目標とすると共に、他の科学や文化一般及び現実社会の動きから目を離さないで、しかもその中に批判的精神を貫くことをモットーとしている。本学哲学専攻の特色としては、また、哲学科が哲学専攻と心理学専攻とに別れている関係もあつて、単に狭い意味の『哲学』およびその歴史だけでなく、論理学、倫理学、教育学、社会学、宗教学、美学などを総合的に学んで、広い意味の哲学的教養を身につけ、卒業後教育界はもちろんのこと、ジャーナリズムその他あらゆる文化界で活躍できる素地を作り、その他の方面で活動するにしても、しっかりとした世界観人生観をもつことを目的としている。哲学といえは普通西洋哲学を指し、実際日本の哲学の現段階では西洋哲学の研究が主であり、その点は本学でも変わらないのであるが、そのほかに東洋哲学、つまりインド、中国及び日本自身の哲学に関する講義をもっていることも本学哲学専攻の特色である」。

学生数が増え、マスプロ教育と言われるようになる七〇年代以降、研究入門コースが設けられ、また演習の数が大幅に増やされた。たとえば、七五年度には哲学研究入門、哲学基礎演習という科目が置かれ、哲学演習は個別テーマを示さずにⅠA、ⅠB、ⅡA、ⅡBと表示されている。八九年度も哲学演習としてA西川、B寺崎、C木村、D日下部、E服部と記載され、そこに「A哲学一般、一七〜一八世紀の近代哲学、一九世紀ドイツ哲学など。B実践哲学が中心。Cフッサールからポンティに至る現象学の系譜が中心。D西洋古代・中世哲学を中心に。Eヘーゲルからマルクスに至る系譜を中心に」という注記が付されているのみである。

立命館大学に限らず、私立大学の場合、学生定員が国立大学の十倍近くに達することもめずらしくないので、

教育理念に大差がなくても方法は自ずから異なる。概論や哲学史など講義科目は受講生が一〇〇人以上となることもあり、また演習は卒業研究のための個別指導の場というよりも、たんに少人数教育の場にすぎないと言える。しかも西欧のように単位は講義ではなく演習で取得するというのとは違い、授業時間が同じでも講義科目は四単位、演習は二単位となっている。

第六節 同志社大学

同志社大学の前身は、一八七五年（明治八）新島襄によって設立された同志社英学校である。八二年一月七日付「同志社大学設立之主意之骨案」によると、宗教兼哲学、医学、法学の三部からなり（ただし、「当分便宜ノ為哲学ヲ宗教部ニ合併ス」）、宗教兼哲学を教える目的として「克ク造化ノ妙理ト人間ノ要道トヲ探ラシメ又明ニ事物ノ奥蘊ヲ究メシメ学者ヲシテ真理ノ奥妙ヲ味ヒ志操世界ニ逍遙セシメ進ンデハ同胞ノ福祉ヲ計リ邦家ノ進歩ヲ望ミ退イテハ一身ノ徳義ヲ脩メ本心ヲ磨キ真理ニ基キテ動止シ真理ト共ニ生息シ弱キヲ憐ミ暴ヲ制シ曲レルヲ矯メ正キヲ賛ケ百折不撓ノ鉄腸ヲ練リ金石モ徹スヘキ精神ヲ養ヒ普ク同胞ノ幸福ヲ希図シ共ニ進デ文化ノ最高ニ至ランコトヲ要スルニアルナリ」（『同志社百年史 資料編一』一九七九年、一五八頁）と記されている。哲学関連科目は第一学年次に割り当てられ、論理学（ゼボン氏論理学）、倫理学（大西祝氏倫理学）、哲学史（波多野精一氏西洋哲学史要）が課せられている。

二〇年大学令により大学に昇格、文学部（神学科・英文科）と法学部を擁した。二七年、これまで「当分便宜ノ為哲学ヲ宗教部ニ合併ス」とされていた哲学科が独立し、キリスト教的世界観に基づく人格主義的哲学の形成が目差されたが、三九年二月の国民精神総動員強化指令により、四一年哲学科と英文科が廃止となり、新たに作ら

れた文化学科に吸収された。戦後の四六年、神学科が独立して神学部となり、英文学科は復興されたが、哲学科は文化学科のなかにとどまった。文化学科は哲学及び倫理学、教育学及び心理学、美学及び芸術学、文化史学の四専攻となった（『同志社九十年小史』、一九六五年、参照）。二〇〇〇年度現在の組織は、神学部神学科、文学部英文学科、同文化学科（哲学及倫理学専攻、教育学専攻、心理学専攻、美学及芸術学専攻、文化史学専攻、国文学専攻）、同社会科学、法学部法律学科、同政治学科、経済学部経済学科、商学部商学科、工学部となっており、哲学に関する限り戦後の組織的変更は見られない。

一九四九年度文学部文化学科の共通必修科目は「哲学概論 濱田與助」「倫理学概論 平石善司」ほか一科目あり、哲学・倫理学専攻の科目として「西洋古代中世哲学史概説 平石」「西洋近世哲学史概説 今谷逸之助」「西洋倫理学史概説 平石」「東洋倫理学史概説 佐藤慶治」「倫理学特講 高田武四郎」が開講されている。六〇年代以降、英書講読、独書講読、仏書講読などの科目が置かれ、また五名の教員が担当する演習が開かれている。七〇年代以降は学生数の増加にともない、三、四年生向けの演習の数がさらに増え、またこれとは別に一年生から三年生向けに基礎演習が二コースずつ開講されるようになった。

参考のために八〇年度の開講科目を挙げておきたい。哲学基礎演習Ⅰ（川島秀和、K. Spennemann、長沢邦彦）、哲学基礎演習Ⅱ（片山寿昭、日下昭夫、吉田謙二）、哲学概論（中桐大有）、倫理学概論（平石善司）、演習（平石、中桐、片山、川島、日下、Spennemann、吉田、長沢）、キリスト教精神史（土肥昭夫）、日本倫理思想史（村上敏治）、仏教学（工藤成樹）、現代哲学（吉田）、科学哲学（中桐）、歴史哲学（長沢）、宗教哲学（森田雄三郎）、西洋古代中世哲学史概説（日下）、西洋近世哲学史概説（片山）、西洋倫理学史概説（川島）、哲学特論（千阪靖朗）、倫理学特論（小熊勢記）、英書講読ⅠⅡ Tarski, The semantic conception of truth（吉田）、独書講読Ⅰ A. Schweitzer,

Kultur und Ethik (Spemann)」、独書講読Ⅱ（長沢）、「仏書講読Ⅰ Perelman, Le champ de l'argumentation（日下）」、「仏書講読Ⅱ Deleuze, La philosophie critique de Kant（片山）」、「法哲学（八木鉄男）」、「社会哲学（Spemann）」。

同志社大学の哲学教育の特徴として、戦前はキリスト教学と一体のものとして哲学が位置づけられていたこと、戦後は哲学科ではなく文化学科として位置づけられながらも、他大学と比べて特別「文化」が強調されているわけでもないこと、しかしまたプラトンやアリストテレス、トマス、デカルト、カント、ヘーゲルといった哲学の古典が扱われることが少ないこと、哲学と倫理学が同じ専攻科のなかにあること、などが指摘できる。

（つづく）